

※ 本コラムは、共同通信社より配信されたものです。

休日や診療所備える

明治の最先端工場

来年の世界文化遺産登録を目指している群馬県富岡市の富岡製糸場を見学しました。日本で初の近代的製糸工場ですが、1872年に設置された当初は、従業員を集めるのに苦労したそうです。外国人指導者に「生き血を吸われる」という風評が広がり、応募する人がいなかったからです。

そうした中で、明治の著名な実業家、渋沢栄一の親戚だった尾高惇忠が初代の場長に起用されて、彼の娘が最初の「女工」になりました。その後、地元群馬をはじめ埼玉、長野、神奈川の各県から約400人の女性が集まりました。ほとんどが士族や有力者の娘だったそうです。

彼女たちは、富岡製糸場で学んだ技術を故郷に持ち帰りました。群馬県高崎市や、埼玉県秩父地方、東京都八王子市の周辺などで生糸や絹織物が生産されるようになり、横浜港から輸出されました。貿易で得た外貨は日本の近代化に生かされました。官営で始まった富岡製糸場の女性らは、最先端の技術者集団だったと言えます。

富岡製糸場で技術指導をしたフランス人のブリュナはヨーロッパ式の就労規則を導入しました。労働は1日8時間弱で、日曜日は休みだったそうです。製糸場には診療所もありました。

しかし時間が経過すると製糸場で働く女性たちは過重な夜間労働を強いられ「女工哀史」の時代になります。

利益優先で長時間労働になるのは、今に通じるものがあります。ただ、赤字を出し続けるわけにもいきません。経営の健全性を保ちながら、生き生きと誇りを持って働ける環境をつくることは、今も昔も大事な経営課題です。（株式会社グッドバンカー）